



介護福祉士に求められる 資質・能力とその評価

はじめに

超高齢社会を迎えた我が国にとって介護人材の育成は国家レベルでの喫緊の課題であり、優秀な介護福祉士を育て介護現場へ送り出すことが我々介護福祉士養成施設教員の使命である。

その使命を全うする上で重要な課題は「介護福祉士に必要とされる資質・能力を持っていることをどのように評価するか」ではなからうか。

これはすなわち、我々介護福祉士の専門性を明確化することに他ならない。なぜなら「介護福祉士として必要な資質」「介護福祉士として働くにふさわしい能力」を有しているか評価するということは「介護福祉士としての専門性を正しく理解し発揮できる能力を有している

か評価する」ことと置き換えることが可能であるからである。

1 介護とは誰にでもできる簡単な仕事なのか

本学の介護福祉士課程の課程選択は、今年度まで入学直後の四月の段階で行なわれていた。新入生ガイダンスでカリキュラムを説明した後、一年生の春学期に課程選択必修科目である「介護過程Ⅰ」を履修し、資格課程登録をする必要がある。

その「介護過程Ⅰ」期末テストの最後にこの授業を受けた感想を書かせているが、そこには毎年のように「介護はただ食事や入浴、排泄のお世話をするだけだと思っていた」「介護をするためにたくさんの専門的な知識が必要だと学んだ」といった内容の文章が綴られている。

介護福祉士を目指して本学に入学してきた学生達ですら、介護について専門的な内容を学ぶ以前には介護を「ただ食事や入浴、排泄のお世話」をするもので「たくさんの専門的な知識が必要」だとは知らなかった、ということがこれらの文章から読み取れる。いわんや介護に興味関心のない一般市民においてをや。だからこそ、未曾有の介護人材不足に外国人労働者の参入が国策として是とされる流れもやむを得ないのであろう。

介護人材の不足に関する話題が取り上げられる際に、介護職の離職率の高さも並列して語られることが多い。その離職率の高さの理由は待遇の劣悪さだと断言されることも見受けられるが、筆者にはそれだけが理由だとは思えない。

根拠は本学の介護福祉士課程を卒業し、介護福祉士国家資格を取得して高齢者福祉施設・障害者福祉施設・福祉事業所・病院などの介護現場に介護職として就職した学生の離職率が非常に低いことにある。

就職先を選択する際にキャリアセンター職員の助言はもちろん、我々教員もあらゆる角度から学生の選んだ就職先について情報を収集し、その施設や事業所のあらゆる勤務条件を検討した上で助言を行っている（そもそも介護福祉系の職場は環境が劣悪といわれるところばかり

注目をされているが、有資格者の介護職に対して一般企業以上の高待遇を示している施設や事業所も多数存在するのである)。そのような努力も離職率の低さの大きな要因であると思うが、それ以上に大きいのは卒業生達が介護福祉に必要な資質・能力を身につけた上で卒業したことにあると考える。

2 介護福祉士に求められる専門性

平成19年の介護福祉士養成カリキュラム改定が行なわれた際、厚生労働省 社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室は「これからの介護福祉士については、介護福祉士創設以降の変化とこれからの介護ニーズに対応し、介護サービスにおける中心的役割を担える人材として次のような人材養成における目標が考えられる」として「求められる介護福祉士像」を以下のように示した。

- ① 尊厳を支えるケアの実践
- ② 現場で必要とされる実践的能力
- ③ 自立支援を重視し、これからの介護ニーズ、政策にも対応できる
- ④ 施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力
- ⑤ 心理的・社会的支援の重視
- ⑥ 予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる
- ⑦ 多職種協働によるチームケア
- ⑧ 一人でも基本的な対応ができる
- ⑨ 「個別ケア」の実践
- ⑩ 利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力
- ⑪ 関連領域の基本的な理解
- ⑫ 高い倫理性の保持

本学の介護福祉士養成課程も定められた1850時間のカリキュラムの中で、高度な専門職として求められる介護福祉士となることを目標に専門職養成を進めてきた。

もちろん、卒業・国家資格取得と同時にここに掲げら

れた全ての能力が備わっているわけではない。ただ、学生達に君達の志す介護福祉士という資格は、経験を積んだ上で上記のような役割を果たすことが社会から期待されているのだということを、一年次から繰り返し教えている。

なぜ、1850という時間数が受験資格の取得のために必要なのか、それは介護福祉士が人の生命と人生に携わる重い責任を負う仕事だからである。

先述の離職率の話に戻るが、介護職として就職をする人の中には「介護しか」働く場所が無いので次の仕事が決まるまで「介護でも」やるか、と安易に考え無資格未経験のまま就職する「でもしか」介護職もいると聞く。そのような人々が介護という仕事の本質に触れたとき、その奥深さ、責任の重さに恐れをなし尻尾を巻いて退散するからこそ、介護職の離職率は高くなっているのではないかと筆者は考える。

はじめから己の目指す職の専門性の高さ、責任の重さ、得られるものの尊さを理解し、その専門性の高さを維持し責任を全うする為に、何を学び身につけなければならないのか。その自覚が無ければ、1850時間という膨大な時間を学内での学びや施設・事業所での実習に費やすことは困難であり、それだけの時間を費やしたからこそ介護という仕事の価値を見出し、己の役割を自覚し大学で身につけた知識を活用して様々な介護現場で介護福祉士として活躍できるのではないだろうか。

介護とは、ただ与えられた仕事をマニュアルどおりにこなすルーティンワークではない。

先述の一年生の感想は、いままでマニュアルどおりのルーティンワークだと思っていた介護が実はそうではないと気付いたことを素直に吐露していると筆者は理解している。

では、介護という仕事に必要な資質・能力とはどのようなものなのか。筆者が日頃講義において学生達に伝えていることを簡便に述べていきたい。

3 介護福祉士に必要な能力とは

筆者が介護福祉士教育において重要だと考える能力とは「気づき」である。

福祉施設でも自宅でも、介護職が支えるのは日常生活である。それが介護＝ルーティンワークと思われがちな一端でもあると思うのだが、その日常生活の中で発生する些末な「異変」に可能な限り早く気づくことが出来れば、さまざまなアクシデント（転倒や失禁、あるいは大病の前兆）は未然に防げることが多い。その為に必要なのは要介護者の「いつも通りの様子」を把握し「いつもと違う様子」に気づけることである。その「気づき」が出来るようになる為に必要なのが、様々な「知識」である。

それは人間が一日に摂取する水分量と排泄する量であったり、正常時の脈拍や呼吸数であったり、高齢者の病変による症状が非定型的（肺炎なのに熱が出ないなど）である可能性がある、など医学的な知識も含み多岐に渡る。そして、ただそれらの知識が頭に入っているだけで実際に要介護者と接する中でその知識を活用して「気づくこと」が出来なければ知識を有している意味はない。

この能力を大学教育の中でどう評価するのか。知識の部分は筆記試験の結果で判断することが出来る。しかし実際にその知識を使いこなすことが出来るかどうか、これを評価する機会は450時間に及ぶ介護実習の中で学生達が取り組む「個別介護計画」の作成過程にある。

学生達は介護実習先の高齢者福祉施設で対象となる高齢者を一人選ばせて頂き、限られた実習時間の中でその方と関わり、日常生活のお世話をさせて頂く中でありとあらゆる場面を観察する。観察した事実を記録し、その中から「この方の生活をよりよくするには何が必要か」を考え、根拠に基づいた計画を立て実践する。

その過程の中で、身につけた知識が正しく活用され、判断の根拠となっているかを我々教員と施設の実習指導者が評価することになる。

この個別介護計画の立案と実践に到るまでに、学生達は「生活支援技術」「コミュニケーション技術」「こころとからだのしくみ」「認知症ケア」「介護過程」「医学一

般」「介護の基本」「介護総合演習」「生活科学概論」などの専門科目を履修し単位を取得していく。

「介護実習」における「個別介護計画」の立案実践は、今まで履修してきた各科目での学びが正しく理解され統合されているかどうかを評価する場でもある。

介護実習450時間の内訳は「介護実習Ⅰ」が12日間、「介護実習Ⅱ」が18日間、「介護実習Ⅲ」が施設25日間、訪問介護が3日間であるが、学生達はこの期間遅刻欠席をせず実習に臨めるよう、日々の課題に取り組みながら体調管理も継続する。

自分の体調も管理出来ない人間が他人の体調管理を出来るのか、これも筆者が日頃学生達に言い聞かせていることであるが、自分自身の「異変に気づく」のも実践につながる訓練であると考ええる。

そして「気づき」に次いで重要な能力は「読み解く」であると考ええる。

異変に「気づく」だけでなく、その先を予測し何が起るかを目の前の事実から「読み解く」ことが出来なければ、行動に移すことはできない。人にはさまざまな感情があり、思いがある。要介護状態になる前の生活はどのような物だったのか、社会や家庭での役割は、家族や親戚、友人や仕事仲間との繋がり、これまでの人生の積み重ねはその人にとってどれだけ価値のあるものなのか。

我々介護職の仕事とは要介護状態となった人の生活を黒子として支えることだと考える。黒子は芝居の流れを知っていなければ務まらない。今までの芝居の流れ、舞台の上の役者の役割、芝居の結末。人生の結末をあらかじめ知っておくことはできないが、我々は可能な限り「いい芝居(人生)だった」と演者も観客も満足するような幕引きを迎える為に努力を惜しまない。そこで必要になるのもまた幅広い知識であり、人生を豊かにする教養ではないだろうか。

先日、学生達と太平洋戦争に人生を翻弄された高齢者たちの証言を集めたNHKスペシャルを見た。終戦記念日が、原爆投下の日が、東京大空襲の日が高齢者に何を思い起こさせるのか、私自身ももちろん戦後生まれなので私の言葉で伝えるのにも限度がある。しかし、自らの手で親兄弟を射殺した、まだ息のある戦友を見殺しにし

た、避難壕の中で母親が生後六ヶ月の弟の息の根を止めた、それを体験した高齢者が生の言葉で70年以上も前の出来事を、まるで昨日のこのように語り慟哭する姿から学生達は何を読み解くだろうか。

学校で教わることの出来ないことは無限に存在する。我々教員が教えることが出来る内容にも限度がある。だから、最後にもうひとつ介護福祉士として重要な資質は「知らないことを知らないままにしておかない」貪欲な知識欲と好奇心を持っていることであると考ええる。

「知らないことは罪ではないが、知ろうとしないことは罪だ」

先述の太平洋戦争に関する番組を見た後に、筆者は学生にこう伝えた。かつて知識を身につける為に我々は図書館の蔵書を利用したが、現代はあらゆる情報がインターネット上に蔓延し、容易に入手することが出来る。そのような恵まれた環境にいるにも関わらず、知らないことを知ろうとしない、調べようとする事は怠惰以外の何物でもない。

我々教員が今時の若者を理解しようと悪戦苦闘しているのと同じように、学生達も実習で出会った高齢者を理解する為に四苦八苦している。

「利用者さんが『わたしはちよいんの女学校を出たの』っておっしゃるんです」

「『ちよいん』？」

「京都出身の方なんですけど」

「それは『知恩院』じゃないの？」

笑い話のようだが実際に介護実習中の巡回指導で交わされた会話である。その場で調べさせたところ知恩院女学校は実在し、その当時女学校に通わせてもらえる子女はまだまだ少なかった為、それはその方の人生において輝かしい一場面だったのだろう。その話題をどう広げ何を読み解くのか、せつかくの機会を無駄にしないように指導した実習生も、今や介護福祉士として特別養護老人ホームを経て有料老人ホームの介護職として着実にキャリアを積み重ねている。

介護福祉士養成カリキュラムは急激な介護状況の変化に伴い、来年度から改正される。平成29年9月26日第11回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会の資料において、その新たなカリキュラムの元で学ぶ介

介護福祉士には

- ① 尊厳と自立を支えるケアを実践する
- ② 専門職として自律的に介護過程の展開ができる
- ③ 身体的な支援だけでなく、心理的・社会的支援も展開できる
- ④ 介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、本人や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる
- ⑤ QOL (生活の質) の維持・向上の視点を持って、介護予防からリハビリテーション、看取りまで、対象者の状態の変化に対応できる
- ⑥ 地域の中で、施設・在宅にかかわらず、本人が望む生活を支えることができる
- ⑦ 関連領域の基本的なことを理解し、多職種協働によるチームケアを実践する
- ⑧ 本人や家族、チームに対するコミュニケーションや、的確な記録・記述ができる
- ⑨ 制度を理解しつつ、地域や社会のニーズに対応できる
- ⑩ 介護職の中で中核的な役割を担う + 高い倫理性の保持

これらの実践力が求められることが明らかにされた。

様々な逆風の中、介護福祉士になりたいという目標を持って入学してきた学生達の資質を伸ばすためにも、求められる能力を身につける教育をし、正しく評価して送り出す我々の教育内容も更なる発展が求められていると言えよう。

結びの言葉に代えて、今年度入学してきた一年生が「介護過程Ⅰ」の期末試験の最後、「この科目を学んで分かったこと、考えたこと、授業中印象に残ったこと」に寄せた一文を掲載したい。

「介護について学び始める前は、介護とは決して楽なものではないが意欲さえあればどんな人にも行なえるものだと思っていた。しかし実際にはとても専門的な分野であり、正しい知識がなければ行なうことのできないものなのだとわかった。介護は人を相手にする職業であり、私達の専門的な知識や技術は、言わばお客様に提供する商品にあたる。その“商品”である知識・技術は質の高いものでなければいけない。介護の現場において正解の答えとなる

ものは決して一通りではないと思う。介護を受け取る側や提供する側の考え方はもちろん一人一人違っているし、だからこそいくら経験を重ねたとしても、その後ももっと上を目指そうと常に成長することが可能であると思う。」

その成長を傍らで見守り、教育出来ることが楽しみである。